

⑬ 日本国特許庁 (J P)

⑭ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報 (U)

昭62-54978

⑮ Int. Cl. 4

B 65 D 83/00
23/00

識別記号

庁内整理番号

G-7912-3E
E-6927-3E

⑯ 公開 昭和62年(1987)4月6日

審査請求 有 (全1頁)

⑰ 考案の名称 計量器付きボトル

⑱ 実 願 昭60-83956

⑲ 出 願 昭60(1985)6月5日

⑳ 考 案 者 宮 久 保 金 治 野田市清水245番地の18

㉑ 出 願 人 白金樹脂工業株式会社 松戸市松戸1283番地

㉒ 代 理 人 弁理士 新垣 盛克

㉓ 実用新案登録請求の範囲

貯留部を密閉可能且つ押圧自在に形成し、適所に所定量の液体を計量する計量器を貯留部と一体的に形成し、さらに貯留部と計量器とを通液路で接続したことを特徴とする計量器付きボトル。

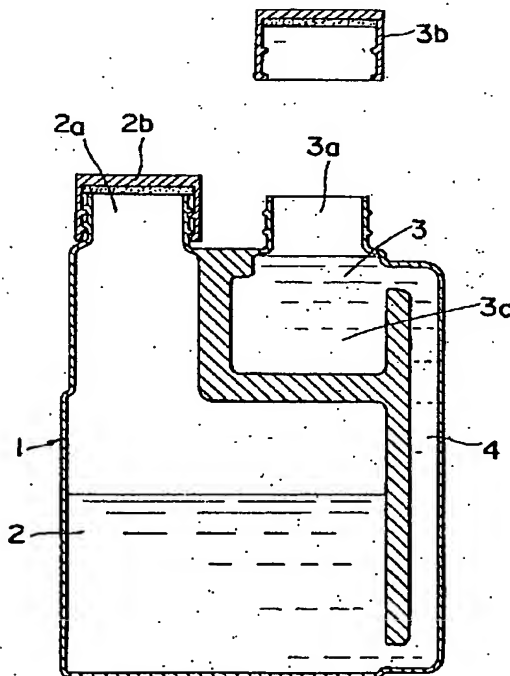
図面の簡単な説明

第1図は貯留部から計量器へ液体を送った状態

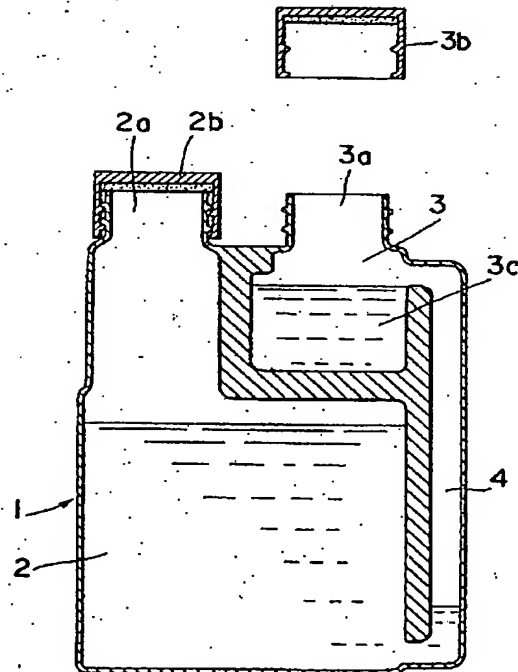
の縦中央断面図、第2図は液体を計量した状態の縦中央断面図を示す。

1 ……ボトル、2 ……貯留部、3 ……計量器、4 ……通液路。

第1図



第2図



公開実用 昭和62- 54978

⑨ 日本国特許庁(JP)

⑩ 実用新案出願公開

⑫ 公開実用新案公報(U)

昭62- 54978

⑮ Int.Cl.⁴B 65 D 83/00
23/00

識別記号

庁内整理番号

G-7912-3E
E-6927-3E

⑬ 公開 昭和62年(1987)4月6日

審査請求 有 (全 頁)

⑭ 考案の名称 計量器付きボトル

⑯ 実 願 昭60-83956

⑰ 出 願 昭60(1985)6月5日

⑱ 考 案 者 宮 久 保 金 治 野田市清水245番地の18

⑲ 出 願 人 白金樹脂工業株式会社 松戸市松戸1283番地

⑳ 代 理 人 弁理士 新垣 盛克

明 細 書

1. 考案の名称

計量器付きボトル

2. 実用新案登録請求の範囲

貯留部を密閉可能且つ押圧自在に形成し、適所に所定量の液体を計量する計量器を貯留部と一体的に形成し、さらに貯留部と計量器とを通液路で接続したことを特徴とする計量器付きボトル。

3. 考案の詳細な説明

〔産業上の利用分野〕

本考案は、貯留部内の液状の洗剤あるいは薬剤等を所定量ずつ計量して供給できるようにした計量器付きのボトルに関する。

〔従来技術と問題点〕

従来、容器内に入っている液体、例えば液状の洗剤や薬剤を所定の量だけ計量して使用する場合は、容器のキャップあるいは容器と別個に設けたカップ等を計量器とし、これら計量器を用いて行なっていた。

しかし、これら従来の方法によると計量するために容器から計量器に液体を注入する作業が面倒であるばかりでなく、その液体が往々にしてこぼれ、手や衣服を汚したり、液体が薬剤の場合には手や衣服を損傷するといった問題点を有していた。

〔問題点の解決手段〕

本考案は、上述の問題点に鑑みてなされたもので、所定量の液体を、手や衣服等を汚したり損傷したりすることなく計量して供給できるようにした計量器付きボトルの提供を目的としている。

そして本考案は、上記目的を達成するため、貯留部を密閉可能且つ押圧自在に形成するとともに、この貯留部の上方に、所定量の液体を計量する計量器を貯留部と一体的に形成し、さらに、貯留部の下部と計量器の上部を通液路で接続した構成としてある。

〔実施例〕

次に、本考案の一実施例を図面にもとづいて詳細に説明する。

第1図及び第2図は実施例の計量器付きボトル

の縦中央断面図を示すもので、第 1 図は貯留部から計量器へ液体を送つた状態の断面図、第 2 図は液体を計量した状態の断面図である。これら図面において、1 は容器であり、貯留部 2、計量器 3 及び通液路 4 によつて構成されている。

貯留部 2 は、容器 1 の大部分を占め、液状の洗剤あるいは薬剤等の液体を貯留している。この貯留部 2 の一部上部には、液体を貯留部 2 に注入するための注入口 2 a と、この注入口 2 a を密封する蓋 2 b とが設けてある。したがつて、液体を注入した後、注入口 2 a に蓋 2 b をすると、貯留部 2 は密封された状態となる。本実施例の場合、容器 1 全体が弾力性を有する合成樹脂材によつて一体成形されており、貯留部 2 も、通常の状態を持つた場合には変形しないが、手にやや力を入れた場合には変形するように形成してある。

計量器 3 は、貯留部 2 の右上方において貯留部 2 と一体的に形成してあり、その上部には計量した液体を排出するための排出口 3 a と、この蓋 3 b とが設けてある。通液路 4 は、貯留部 2 の底面に

近い下部と、計量器 3 の上部とを接続し、貯留部 2 内の液体を計量器 3 に送ることができるようにしてある。計量器 3 は、通液路 4 と接続している位置より下部を実質上の計量部 3c としてあり、この部分の容積は、液体の種類に応じて適当な大きさとしてある。ここには、目盛りを施してもよい。また、少なくとも、計量器 3 は透明もしくは半透明の材料を用い、計量器 3 の内部を見えるように形成することが望ましい。さらに計量器 3 の位置は、実施例の如きものが使用し易いが、これに限られるものではなく、用途に応じ、適当な個所に設定してよい。

このように構成した計量器付きボトルによれば、ボトル 1 を持ち、貯留部 2 を押圧すると、貯留部 2 内の液体は通液路 4 を通つて計量器 3 に送られる。計量器 3 に液体が十分満たされた状態（第 1 図）で貯留部 2 の押圧を解除すると、計量器 3 の計量部 3c に注入された液体以外は、貯留部 2 の復元にもとづく吸引力によつて通液路 4 を通り貯留部 2 内に戻される。一方、計量器 3 の計量部 3c

には所定量の液体が残り、これにより計量が行なわれたことになる（第 2 図）。次いで、容器 1 を横にして計量器 3 の排出口 3 a から液体を排出する。このとき、貯留部 2 は密封されているので、通液路 4 を介して貯留部 2 内の液体が流出することはない。

なお、ボトルを使い捨てとする場合には、貯留部に注入口を設ける必要はなく、貯留部に液体を注入した後密封しておけばよい。

〔 考案の効果 〕

本考案は、上述の如く構成してあるので、所定量の液体を計量するのに手や衣服を汚したり損傷したりすることがない。また、把持する手に多少力を入れるだけで正確な計量を行なえるとともに、片手だけで操作できるので非常に使い易いといった効果を有する。

4. 図面の簡単な説明

第 1 図は貯留部から計量器へ液体を送った状態の縦中央断面図、第 2 図は液体を計量した状態の縦中央断面図を示す。

1 ボトル, 2 貯留部, 3 計量
器, 4 通液路。

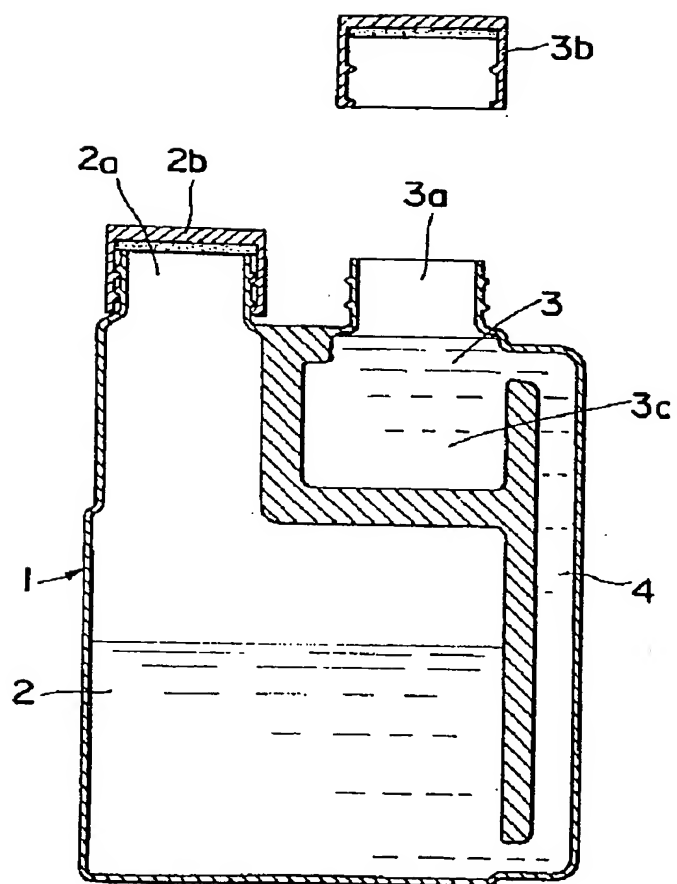
実用新案登録出願人

白金樹脂工業株式会社

代理人弁理士

新垣盛克

第 1 圖



第 2 圖

